

タ リ タ ・ ク ム

# “Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第24号

2015年5月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者: 大岡左代子

## 「随 想」

主教 サムエル 大西 修

わたしが聖職候補生になった1960年代は日本聖公会にまだ婦人伝道師がかなりいました。中部教区もカナダ聖公会からの婦人伝道師、そして日本人の婦人伝道師が何人かいました。1978年に中部教区で日本聖公会初の女性の聖職として婦人伝道師渋川良子師が執事に叙任され、それから20年後、1998年の総会で女性司祭が認められ、同年12月、同師が初の女性司祭に叙任されました。2008年には女性司祭誕生10周年感謝礼拝が名古屋聖マタイ教会で行われ、その後も現在までに7教区で20人近い女性聖職が誕生し、現在は10数人が現職として活躍しています。また聖職をめざして神学校で学んでいる方もいます。

35年以上経った今日でも、普通に聖職とは言われず、あえて「女性の」聖職と言わざるを得ないほど、いまだに特異な存在として「女性の」聖職が受けとめられていることは否めない事実です。初めて聖職になられた時の渋川執事の思いはさぞかし複雑で、身の置き場のない、居心地の悪い立場にあっただろうなあと同僚としてしばしば感じておりました。聖職の集まりで男性の聖職の何げない言動に、戸惑い、傷つき、心を痛めていたこともしばしばあったのではないかと思います。そのことは今もあまり変わらないのかもしれませんが。

男性中心主義の考え方は一般社会生活の場において今もなお根強く残っています。教会生活の中においても然りです。男性だけではなく、女性の中にもこの考え方がかなり色濃く残っているのではないのでしょうか。特に教会生活が長い人にこの考え方が多いようにわたしには思われます。「どんなことでもまず男性から」といった考え方がごく普通に、何の疑いもなく通用している現実の姿を教会の中にかくさん見ることができるからです。

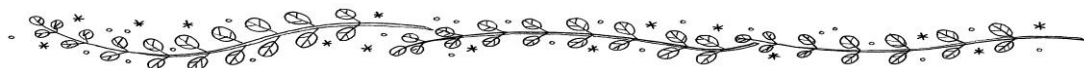
宣教の働きは神のなさる業ですが、その働きに参加させていただくのは、神に創造された男であり女であります。キリストの体としての教会の働きは、男女の別なく各自が与えられ

た賜物を最大限に生かしていくことによって実を結んでいきます。

2009年9月22日、日本聖公会宣教150周年記念の「夕の礼拝」でわたしが司式をさせていただき、キャサリン・ジェファーツ・ショーリ米国聖公会総裁主教が説教をされました。その時、こんなことを心の片隅に思い描いていました。女性の聖職が「女性の」を付けずにごく普通に「聖職」と呼ばれるようになる日がやってくるのは何時だろうか。日本聖公会の中に女性の主教が生まれるのは何時だろうか。その時、教会はきっと大きく変っているだろうなあ。英国聖公会でも女性の主教が生まれました。

日本聖公会の中に、もっともっと聖職に召される人が与えられることを祈っている昨今です。

「はっきり言うておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。」(ヨハネ 16:23)



## 「沖縄教区に2人の女性の司祭誕生！」

去る3月21日(土)、沖縄教区北谷諸魂教会において司祭按手式が執り行われ、二人の女性の司祭が誕生しました。説教者は、北海道教区のヘレナ木村夕子司祭。また、ダビデ上原榮正主教による初めての聖職按手式であり、沖縄教区の喜びはもとより、各地から多くの方がお祝いにつけました。これからのお二人のお働きのうえに神さまの祝福と導きを心からお祈りいたします。

### 「新聖堂建築に向けて」



三原聖ペテロ聖パウロ教会 副牧師  
ナザレ幼稚園 チャプレン  
司祭 ルシア 並里 輝枝



主の平安をお祈りします。

ウイリアムス神学館を卒業後、主教座聖堂三原聖ペテロ聖パウロ教会で、聖職候補生、執事、司祭として奉仕させて頂いています。三原聖ペテロ聖パウロ教会は、老朽化に伴い数年前から建て直す事が計画されており、昨年、教会の引越してでんでこ舞いでした。

今年初めから教会の解体工事が始まり、隣近所、地域の方々に騒音その他の迷惑をかける為に、一軒一軒挨拶すると、皆さんは快く応じてくれ「どのような教会を建てるのですか？楽しみですわね。」の声を頂き嬉しかったです。地域に根差した教会造りになることを祈っています。現在は、教会の建物は全てなくなり、更地になっていますが、近いうちに起工式をして、いよいよ教会建築が始まります。

日曜日の礼拝は、道路真向かいにあるナザレ幼稚園のホールを利用して主日礼拝を守っているのですが、金曜日の夕方、椅子を並べ、祭壇をつくり、礼拝準備をするとき、幼稚園の先生方が手伝ってくれます。日曜日の礼拝が終わると、翌日の幼稚園の礼拝の準備をするのですが、信徒の皆さんが片付けのお手伝いをして下さるといふ事で皆さんに支えて貰い本当に感謝です。日曜日の主日礼拝を迎える時間も、緊張とともに楽しみです。月曜日のナザレ幼稚園の礼拝が一番楽しみです。園児たちに神様のこと、イエス様のこと、み言葉を話して共に祈ることができるのは、なんて素晴らしいことだろうと思っています。主に感謝！

## 「もちいたまえ、神よ」(聖歌505番)



屋我地聖ルカ教会 副牧師  
司祭 グロリア 西平 妙子



2015年3月21日(土) 沖縄教区日に司祭として叙任されました。女性司祭の道が閉ざされていた時代のことを考えると、尽力くださった皆様の、忍耐と祈りに対して、一言のお礼では言い表せませんが、本当に感謝いたします。神さまの御心でしたら司祭接手してください、と祈りながら接手式当日を迎えました。多くの方々が接手式の礼拝に出席くださいました。接手式のために、遠くから飛行機に乗って駆けつけて下さる方もいらっしゃり、本当にありがたく思いました。午後は教区の行事として、初めて行う聖歌祭があり、盛りだくさんの一日でした。そのため、出席くださった皆様とお話しできなかったことが、申し訳なく思いました。また、祝福の時間がとれなかったことも、少し残念に思いました。司祭となって、一ヶ月がたちました。屋我地聖ルカ教会の牧師補から副牧師となりました。祈りの家教会での勤務も行っていきます。日曜日は、毎主日朝の9時に祈りの家教会の補式を行います。その後10時半から聖ルカ教会の聖餐式の司式を月に二回行います。他の二回は退職された司祭様が司式をしてくださり、補式を行います。司祭として、先輩司祭の司式を毎週見ることができることができます。本当に贅沢なことだと思います。これから、神さまがどのように私を用いて下さるか、楽しみです。神さまに祈り求めながら、司祭として、信徒の皆様の祈りに支えられながら、教会生活を、皆様と共に過ごしていきたいと思っております。



## UNCSW/59 と聖公会女性会議に参加して

マーガレット・マリア 福澤真紀子



第59回国連女性の地位委員会 (UNCSW/59) が3月9日から20日までニューヨークで開かれました。本会議中、国連に連なる組織や民間 NGO 団体によって、国連の内外では多くのイベントや発表の場が設けられ、女性や女兒の命や人権に関する問題、戦争・紛争地域における女性の危機的な状況、女性の意思決定への参加の必要性について、世界各地から注意を促す呼びかけや活動が報告されました (NGO CSW/59)。同時にアングリカン・コミュニオンも聖公会女性会議を開き、各国から聖公会の女性の聖職・信徒や数名の男性が集まり、其々の国や教会の抱える問題、女性達による女性達の為の活動を報告しました。国を超えた聖公会女性ネットワーク (IAWN) からは「We will speak out!」と打ち出され、閉ざされた家庭内で起こる暴力や、閉ざされた教会の中で起こる女性や女兒への軽視やハラスメントに黙って屈しない運動も広がりを見せていました。



日本聖公会からは東京教区の笹森田鶴司祭、池住圭氏 (原発と放射能に関する特別問題プロジェクト)、福澤 (だいに・東北) の3名が派遣されました。日本からの派遣は今年で10年目となり、日本が抱える原発事故の影響と、今現地で何が起きているのかを世界へ伝える役割ももって行きました。派遣準備をしてくださった女性デスク、ニューヨーク

日本人会衆 (MJM) の皆様、その他お支えくださった沢山の方々に感謝致します。

国連及び NGO による CSW は、第4回女性会議 (1995年北京) で採択された「北京宣言及び行動綱領」(北京行動綱領) の内容に沿ってこの20年進められてきました。女性の人権を世界の隅々に及ぶネットワークによって喚起する為、各国政府への働きかけや体系的な仕組みづくりを通して、成人女性・女兒の安全でより良い生き方へと世界が協力して働く為につくられたものです。

特に12項目の世界共通の最優先課題については各国政府、民間のあらゆるレベルで (勿論、宗教法人も含まれるでしょう) 達成すべき具体的な目標と行動プランが記されています。

1.女性と貧困 2.女性の教育と訓練 3.女性と健康 4.女性に対する暴力 5.女性と武力紛争 6.女性と経済 7.権力及び意思決定における女性 8.女性の地位向上のための制度的な仕組み 9.女性の人権 10.女性とメディア 11.女性と環境 12.少女の12項目です。20年目の総括では、世界のジェンダー平等の成果は、女性の教育や健康、社会・経済への参加では進歩したものの、社会の意識や男女の固定概念は根本的には変わっていない。貧困、武力紛争、環境の危機において女性や女兒の人権が著しく蔑ろにされている状況はむしろ悪化している。世界はより強く一致協力し大きく進まなくてはならないと結論づけられました。日本でも男女社会共同参画の法整備



は進んでも、男女の役割への固定的・限定的な意識が根本的に変わったか、女性が重要な意思決定の場で十分機能しているかといえば疑問です。教会ではどうでしょうか。自分達の身近な問題として目を向け、其々の場で、積極的に女性の人權やジェンダーの平等について男女共に学び合う場、語らう場を設けてきたでしょうか。



女性会議の合間をぬって、3月7日の主日、私達はニューヨーク日本人会衆(MJMJ)の皆さんと東日本大震災4周年を憶えながら礼拝を捧げました。笹森田鶴司祭の司教と説教でした。4年経っても渦巻く悲しみや、痛みや、怒りがあること。どのように希望へ向かう事ができるのかという心に沁みる説教でした。礼拝後は、原発事故と放射能汚染に影響されている地域の現状と日本聖公会の取り組みを報告し、ニューヨーク

教区と MJMJ からご支援頂いた福島県会津若松市の若松聖愛幼稚園から感謝を伝えるビデオも上映しました。

原発と放射能の問題は聖公会女性会議でも強い関心が向けられました。増え続ける汚染水のタンクに汚染土の袋、思い切り自然に触れて遊べない子ども達、複雑な環境で子育てをしなければならない母達の思い、池住氏の言葉に女性達はすぐに反応し、最終的な会議の声明の中に原発事故で困難が続く福島のことを憶え祈り続けるよう求める段落が入れられました。命を生み出すように創られた女性は、命を傷つけ脅かすもの、破壊するものに本能的な痛みと苦痛を感じるのかもしれませんが。話し合いの中で、発展途上国では原子力発電が生活を豊かにする憧れであるという意見も出されました。私達はそれも理解しなければなりません。しかし、それでも原発は全ての創り主である神様の真逆にあること、原発事故による破壊と人々の苦難の大きさ、取り返しがつかないことを伝えていかなければいけないことを改めて感じました。

女性達がエンパワーされることは、今私達が直面している世界の様々な危機の回避、貧困や格差の撲滅、病気を減らすこと、戦争・紛争の平和的な解決、環境破壊や気候変動によって起こる人的災害、自然災害に対応することと直結します。私達は常に世界の一部であること、また世界は私達の足元から広がっていることを覚えて、今後の活動につなげていきたいと思います。

※UNCSW United Nations Commission on the Status of Women

UNCSW には国連に連なる組織や民間 NGO 団体が参加しています。

アングリカン・コミュニオンも NGO のひとつとして参加します。

MJMJ Metropolitan Japanese Ministry



コラム わたしの瞳に映る景色 ⑪

～ どうして「同性愛」は罪なのでしょうか？ ～

中部教区 司祭 アンブロージア 後藤香織

最近、身近な人からの言葉で、あまり確りと「セクシュアル・マイノリティ」(\*1)を、理解してもらえていないと感じることが、何度がありました。悪気もないことは分かっていますが、同じような言葉を親しくない人に対して発すれば、トラブルになる可能性もあります。また、聞いている方は心地よくありません。

さて「セクシュアル・マイノリティ」を指し示す用語には、「同性愛」、「ゲイ」、「レズビアン」、「トランスジェンダー」、「インターセックス」等々、いろいろあります。なんとなくこんな意味ということは把握して下さっていることと思いますが、人によって定義や使い方が違うことが間々あります。

この「同性愛」という言葉とその対義語「異性愛」や、「トランスジェンダー」とその対義語「シスジェンダー」等という分類は、本来価値中立なものです。良いとか悪いとかの価値判断はされていません。しかし、多くの人には「異性愛」「シスジェンダー」が正常で、「同性愛」「トランスジェンダー」は異常という価値観をこの分類に当てはめます。さらに教会の中では、「同性愛」「トランスジェンダー」は「罪」とまで言われることがあります。

「異性愛」に分類される人々は、もう一方の「同性愛」を、劣ったもの、異常なものとして、貶めることによって、自分たち「異性愛」者が相対的に優れたものであることを確認し、安心します。まさかあのファリサイ派(ルカによる福音書 18 章 11 節参照)のように「この同性愛者のような者でもないことを感謝します。」と祈ったりはしないのでしょうか、自分たち「異性愛」者、「シスジェンダー」が正常で、「同性愛」者や「トランスジェンダー」が異常だという認識は、わりと多くの人の中にあります。

これがいわゆる「差別」の構造です。差別は「違い」を利用して行われますが、この「違い」

自体は価値中立であって、差別の本質ではありません。この「違い」に対する価値判断が「差別」となって表れるのです。

キリスト教は、正典である聖書を自分たちの価値判断の基準として用います。熱心なキリスト教信者の皆さんは、聖書に「同性愛は罪」と記されていると何故か確信しています。それを根拠に、わたしたちセクシュアル・マイノリティの存在が罪で、存在を許しておくわけにはならないと考え、行動に移すことが自らの使命だと信じるのです。「お前はいい」。このような他人の存在を全否定し、命の輝きを奪い取る言葉は、神さまの権威を無理やり後ろ盾にした、暴力であることをまず頭に入れてもらいたいと思います。

キリスト教のように、自分の差別感を肯定出来る根拠があれば、それを利用し自分の誤った思いを正当化し主張したくなる気持ちは、決して同意は出来ませんが理解は出来ます。しかし、キリスト教信者だけではなく、一般的にも人々の思いの中に横たわる「同性愛は認めない」や「気持ち悪い」といった、同性愛者やトランスジェンダーに対する悪いイメージは、いったいどこから来るのでしょうか。今更ですが、「セクシュアル・マイノリティ」に関する基礎知識を、次号から何回かにわたって再確認してみたいと思います。

【(\*1) セクシュアル・マイノリティ

性的な事柄を理由に、差別を受け、少数者の立場に置かれている人たちのこと。同性愛者、両性愛者、トランスセクシュアルなど様々な存在を包括して表す。性的少数者と表現することもある。「同性愛」という言葉に対する嫌悪感を避けるために用いられることもあり、問題をぼやかす危険性がある反面、名称を持っていない性的少数者を含んだ用語として積極的に用いられる側面もある。英語ではLGBTを使う。】



## 「女性の聖職に関わる特別委員会」では・・・

クララ 篠田茜／福井聖三一教会

第61(定期)総会期から立ち上げられた「女性の聖職に関わる特別委員会(女性の聖職に関わる諸問題についての調整と検証・提言作成のための特別委員会)」は、2014年9月と12月に開かれ、2015年3月に3回目の委員会が行われました。委員は、聖職者、信徒各3名(男女各3名)の6名が東京、横浜、九州、京都教区から選出され、女性デスク、管区総主事、管区宣教主事が陪席という構成です。2総会期(4年)の課題として、女性の聖職者からの相談体制を整え実際の対応に当たれるようにすること(調整)、これまでに女性の聖職者に関わって起こってきた事柄についての問題点を他管区の取り組みに学びつつ整理し、現行ガイドラインの今後のあり方について提言すること(検証・提言)を、役割として確認しました。今までのところ、各教区のハラスメント防止委員会規定に照らし合わせて、これまでの調整委員会の問題点をまとめ、またガイドラインについての発題を受けて、委員がそれぞれ意見交換をしました。次回はガイドラインの存続を意味あるものとする委員からの発題です。いろいろな立場の委員が忌憚なく意見を述べるのできる場でもありますが、結論が出るまでまだまだ時間がかかりそうです。

## 第23回聖公会女性フォーラムのご案内

彼女を記念して 一世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、  
この人のしたことも記念として語り伝えられるだろうー (マルコ 14:9)

女性フォーラムなんて初めて耳にした方も、お久しぶりの方も、ぜひご参加ください

日時 2015年 7月19日(日) 16:00 受付  
～ 20日(月・祝) 16:00 解散

会場 岡山聖オーガスチン教会  
〒700-0817 岡山市北区弓之町9-37

参加費 2000円+食費(20日夕食・21日昼食)  
(宿泊は各自でおとりください)

\* 申込み締め切り 6月28日(日)

\* 問い合わせ先 吉谷かおる 携帯 090-8060-3735





## 女性デスクから



### ～今年の世界祈祷日献金お献げ先について報告します～

毎年3月の第1金曜日に日本や世界各地で行われている世界祈祷日礼拝。今年のテーマは「わたしがあなたがたにしたことが分かるカーネーションからのメッセージ」でした。礼拝で献げられた献金は、その年の式文作成国・地域に送られるほか、国内外の女性たちのさまざまな働きを支えたり、世界祈祷日に加わっている各教派・団体が申請する活動や事業のために用いられたりすることになっています。日本聖公会もその一部をいただいており、その用途を託されている女性デスクは、今年、次の3つの取り組みについて申請しました。

①FGM 廃絶を支援する女たちの会 (WAAF) (FGM とは「female genital mutilation/cutting」(女性器切除)の略語。主にアフリカなどで広く行われている女性外性器の一部あるいは全部の切除、時には切除してから外性器を縫合してしまう慣習のことで、出血によるショックや感染症など命に関わる危険を伴っている。)

②ペルー聖公会社会福祉部門 (ペルーには子ども人口の30%、約200万人以上の労働を強いられる子どもがいると言われている。ペルー聖公会では、貧困の中で問題を抱える家庭の子ども、薬物の問題のある子ども、出生証明書のない子ども(育児放棄された子どもと心身に障がいのある子ども含む)などの環境の改善や健康を守るためのプロジェクトに取り組んでおり、薬や食料、ワーカーを必要としている。)

③女性デスク (UNCSW 派遣ほか) (UNCSW および聖公会代表団会合派遣も今年で11回目を数える。今後とも継続して派遣することで、世界的な視野を持って女性に関する課題について考え、取り組んでいきたい。)



## ジェンダープロジェクトより



沖縄教区で2名の女性の司祭が誕生しました。現在、日本聖公会において現役で働いておられる女性の教役者は、司祭14名、執事3名、聖職候補生3名となり、ようやく20名になりました。また、現在2名の聖職候補生が神学校で学んでおられます。「20名も！」なのか「20名しか・・・」なのか……。教役者全体の割合の中では1割にも満たない数字であり、爆発的に増えないのも事実です。しかし、少しずつではありますが増えている、ということも事実です。ジェンダープロジェクトの目的は、女性の聖職を増やすことではなく、ジェンダーに捉われた性別意識から解放されてすべての人が尊重されることです。その結果として性別にとらわれることなく聖職になる人が増えていくとしたら、それは一つの成果ともいえると思います。一方で、今号の巻頭言にあったように一日でも早く「女性の」という言葉を使わずに語れる日が来るようにと心から願います。